



Title	鶴見俊輔・第6次『思想の科学』から見た〈1970年代〉：「サブカルチュア」論を手がかりとして
Author(s)	西谷, 元気
Citation	待兼山論叢. 日本学篇. 2025, 58, p. 19-42
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/100901
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

鶴見俊輔・第6次『思想の科学』から見た 〈1970年代〉

—「サブカルチャー」論を手がかりとして—

西谷 元気

キーワード：1970年代／鶴見俊輔／第6次『思想の科学』／
「サブカルチャー」論／生活者

はじめに

本稿の課題は、第6次『思想の科学』（1972年4月～81年3月）誌上において展開された「サブカルチャー」論に思想史的検討を加えつつ、これを手がかりとして〈1970年代〉という時代の思想状況に光をあてることである。詳しくは後述するが、ここで言う「サブカルチャー」とは、この概念の提唱者である鶴見俊輔（1922～2015）の言葉を引くなら、「論壇ではとりあげられることのまれな、思想として名をつけることのむずかしい、しかし実質的にわれわれの生き方を律している裏文化」¹⁾のことである。このような概念を提起した鶴見と、彼のこの提起をふまえた第6次『思想の科学』の観点から、〈70年代〉像を描き出すことが、本稿の試みである。

まずは、先行研究に批判的検討を加えることにより、本稿がこのように課題を設定する意義について説明しておこう。これまで日本の〈70年代〉は、連合赤軍事件（1972）や第1次オイル・ショック（1973）といった象徴的な出来事に注目する立場から、政治的高揚や高度経済成長の終焉以後として位置づけられることが多く、〈60年代〉と比べてその時代像は曖昧なままにとどまってきた。そのような研究状況を承け、2020年代には、〈70年代〉その

ものを主題とする研究が現れ始めている。その代表的論者である成田龍一は、『『日本沈没』の沈没』²⁾において、近代化や高度成長のなかで禁欲的な主体形成を培ってきた通俗道徳型の民衆意識が侵食され、人びとの心性が大きく変わった転機として1973年に注目している³⁾。また、文化の観点から当該期を論じた日高勝之編『1970年代文化論』では、多様な問題系が結び付いた「『癒合』の時代」として〈70年代〉が捉えられている⁴⁾。成田や日高の研究は、「政治の季節」や「高度経済成長」の〈その後〉として論じられがちであった〈70年代〉に対し、独自の視点を設定しようと試みている点で重要であるが、当時の人びとの生活実感に近い一次資料を分析して、当該期に固有の思想課題を明らかにしようとするような研究はいまだ低調であると言える。そこで、本稿では、70年代を中心に刊行され、人びとの日常生活に重点を置いていた雑誌第6次『思想の科学』と、同誌に思想的基盤となる視点を提供した鶴見俊輔の論考を主要な分析対象とする。

本稿が目指す『思想の科学』は、鶴見を中心として1946年に創刊され、戦後日本の知識人の間で大きな影響力を持ったマルクス主義とは異なるかたちで日本社会に対する批判的視点を提供し続け、1996年まで続いた重要なメディアである。同誌には、創刊当初こそ英米思想の紹介雑誌としての側面が強くあったが、1948年ごろから「ひとびとの哲学」や大衆芸術をテーマとして取り上げるようになり、第2次（改題『芽』1953年1月～54年5月）のころに、人びとの日常生活に視座を置くという基本的なスタンスが確立する。『芽』の時期の『思想の科学』は、生活綴方運動と積極的に関わったり、「身上相談」を特集したりしている。このような同誌の傾向は、講談社や中央公論社といった大手出版社を発行元とするようになった第3次（1954年5月～55年4月）・第4次（1959年1月～61年12月）にも継承され、次第に市井の人びとも雑誌づくりに参加するようになっていった。1962年には、風流夢譚事件を受けた中央公論社が、刊行予定の天皇制特集号を一方的に発売中止にした事件をきっかけに、自主刊行に移行することになる。自主刊行第1期にあたる第5次（1962年4月～72年3月）は、人びとの日常生活への視

座を維持しつつも、日米安保やベトナム戦争、学生運動など〈60年代〉の政治的課題も積極的に扱っていた。

本稿における中心的な分析対象である第6次（自主刊行第2期）のころには、第5次のころに見られた大文字の政治をめぐる議論は後景に退き、人びとの日常生活に強い関心を寄せる従来の傾向が、それまでと比べてより顕著に現れるようになる。第6次の総目次を見てみても、教育や子ども、暮らしや家庭に関する特集がさかんに組まれていることがわかる。⁵⁾ 80年代を中心に刊行されていた第7次（1981年4月～92年12月）が「反ファシズム」を掲げていたことをふまえると、第6次は『芽』以来の『思想の科学』の伝統的なスタンスがもっとも顕著に現れた時期であったと言える。また、同誌を担ったのは、鶴見のような戦後日本思想史を代表する知識人だけでなく、ジャーナリストや学校教師、運動家、さらには会社員や主婦といった非常に広範な社会領域に属する人びとであった。このように、担い手という点において一定の包括性を持っていた同誌を分析することで、〈70年代〉における社会変容の具体的なありさまと、そうした変化を日常生活のレベルで感じていた人びとによる問題提起を高い解像度で捉えることが期待できる。

『思想の科学』については、当事者を中心とする振り返りの文章や座談会の記録、総索引など、充実した資料が存在している。それらの資料のなかで本稿が重視したいのは、天野正子（1938～2015）が、「思考のベクトルをつねに生活「現場」にすえる」人びとを「生活者」と呼び、彼らを担い手として60年代以前から「地下水脈」のように日本全国に広がっていた運動実践が、第6次のころから「サブカルチュア」として展開されたと指摘していることである。⁶⁾ 自主刊行期における同誌の中心人物のひとりであった天野の指摘からは、50年に及ぶ同誌の歴史のなかで、〈70年代〉の「サブカルチュア」論がいかに重要なものであったのかということが読み取れる。このように、関係資料が充実しており、当事者の視点から重要な概念が提示されているにも関わらず、第6次『思想の科学』における「サブカルチュア」論に思想的検討を加えた研究は管見の限り存在しない。

そのような検討を試みる本稿では、同概念を提唱した鶴見俊輔の問題意識と思想実践にも切り込む。戦前・戦中期にアメリカでプラグマティズムの哲学を学んだ鶴見は、東西冷戦に大きな影響を受けていた戦後の日本社会において、独自の立場から、哲学や思想、大衆芸術に関する数多くの論説や書籍を著した。また、思想の科学研究会のメンバーたちとさまざまなテーマで共同研究を行い、60年安保やベトナム戦争に際しては、「声なき声の会」（1960）や「ベ平連」（1965）の発足にも携わった。以上のように、戦後における鶴見の活動は多岐に渡っているが、本稿では、60年代を中心に鶴見が展開した「限界領域」に関連する議論と、70年代の第6次『思想の科学』におけるこの議論の思想的展開に焦点をあてる。鶴見に関する先行研究は数多く存在するが⁷⁾、「限界芸術論」については、50年代以前に鶴見が取り組んだ大衆芸術論との連続性を強調する議論が多く⁸⁾、70年代において、この議論が多くの人びとに担われることによって、どのような可能性を切り拓いたのかについては十分に論じられていない。

以上のような研究状況をふまえて、本稿では、まず、60年代を中心に鶴見が展開した「限界領域」論がどのような問題意識から提起されたのか、またそこにどのような思想史的意義があったのかについて考察する。次に、第6次『思想の科学』誌上における「限界領域」論から「サブカルチュア」論への展開について検討する。そのうえで、同誌で重視されていた〈70年代〉の社会課題に対して、「サブカルチュア」論に根ざした抵抗がどのようなかたちで実践されていったのかを分析する。以上のような作業を通して、鶴見俊輔・第6次『思想の科学』の観点から〈1970年代〉に光をあて、そこから見えてくるこの時代の特徴的な思想課題を明らかにする。

第1節 鶴見俊輔の「限界領域」論とその可能性

(1) 鶴見のプラグマティズム理解と「反哲学主義」

鶴見の「限界領域」論について考えるにあたり、まずは日本における哲学

観に対して戦中から鶴見が抱いていた問題意識に触れておく。ここでは、そうした批判がプラグマティズムの観点に立って展開されたということに注目し、「日本の思想（哲学）の変革にねらいを定めた鶴見独自のプラグマティズム論」⁹⁾と評されている『アメリカ哲学』を主な分析対象とする。¹⁰⁾

さて、鶴見は具体的に日本の哲学のどのような点に問題があると考え、それを変革するための手がかりとして、プラグマティズムのどのような側面を重視したのだろうか。鶴見は、当時の日本には、哲学の思想体系を「いくつもの部分に切りはなし得るものではなく」、「一枚のものとして扱おう」とする「哲学的思索法」が根強く存在していると主張する（255～256頁）。そして、このような哲学観に立つ人びとは、思想体系を正しいか正しくないかの二元論で捉えてしまう傾向があると指摘する。鶴見は、「思想は行為の一段階だ」という主張を掲げて生まれたプラグマティズムには、日本における「哲学的思索法」を克服するための「反哲学主義」が流れていると評価する（257頁）。

このようなプラグマティズム観に立つ鶴見は、同書において、パース哲学の主要な方法論のひとつである「マチガイ主義」（fallibilism）を紹介している。これは、鶴見によれば、人間の知識は「絶対的な確かさ、絶対的な精密さ、絶対的な普遍性」に決して達することができず、「マチガイを何度も重ねながら、マチガイの度合の少ない方向に向かって進む」ことで向上していくものであると捉える思想のことである（28頁）。ひとつの立場を堅持したり、絶対的な正義を掲げたりするような従来の哲学観を変革していくべきだと考えた鶴見は、プラグマティズムに流れる「反哲学主義」を徹底する必要性を訴え、「マチガイ」の可能性を孕みながら改良へと向かっていく、柔軟性に富む思想のあり方を模索した。

また、鶴見は、「反哲学主義」の傾向を持って出発したはずのプラグマティズムの思想家たちが「結局は哲学界の空気にそまって、哲学者めいたものになりさがってしまったために、その挑戦は中途半端になってしまった」と指摘し、「哲学を、哲学者の手からとりもどして、人々にかえすこと」で

「反哲学主義」を徹底するべきであると主張する（257～259頁）。同書では、「人々の現在すごしつつある日常生活が、いかなる哲学を要求するかを考えること」を哲学の出発点とするマックス・オットー（1876～1968）が重要なプラグマティストのひとりとして紹介されているが（108頁）、これは、日常生活から遊離しがちな日本の哲学・思想を、「ひとびと」の側から捉え直そうとしていたためであると考えられる。

鶴見は、哲学とは、「それぞれの人の生き方、見方、考え方、の反省」であり、「学問におけるような厳密さをもって問題を解くことができない」「ニセ学問」であるとしたうえで、これまでばらばらに存在してきた学問と実践という2つの領域をつなぐためには、「ニセ学問という中間領域」の発達が必要であると主張している（259～261頁）。その後の鶴見の著述活動を追っていくと、「中間領域」に対する問題意識は、「大衆芸術」やサークル活動の研究を経て、「限界領域」として認識されるようになっていったと整理することができる。以下では、「反哲学主義」の議論をふまえつつ、芸術や政治といった分野にも視野を広げて、「限界領域」に鶴見がどのような可能性を見出していたのかを明らかにしていく。

（2）「限界領域」とは何か

鶴見は、40年代末から大衆小説や漫画についての論考も書いており、この時期の『思想の科学』においても、「大衆小説の研究」（1948年2月号）や「映画研究の方法」（1948年7月号）といった特集を組んでいる。1951年には、京大人文学研究所で「大衆文化研究会」の発足に参加している。60年代に入ると、このような「大衆芸術」に関連する議論は、「限界芸術」として発展的に論じられるようになっていく。¹¹⁾ 鶴見は、「芸術」を「純粋芸術（Pure Art）」、「大衆芸術（Popular Art）」、「限界芸術（Marginal Art）」の3つに区分して、「純粋芸術」や「大衆芸術」よりも「さらに広大な領域で芸術と生活との境界線にあたる作品」を「限界芸術」と呼称する（14頁）。鶴見は、『限界芸術論』の解説において、以下のように述べている。

くらしをひとつの領土と見て、そのへりにあたる部分を、いくらか専門化した芸術、学問、政治と見る。そう見る時に、くらしの中に芸術、学問、政治がとりこんであるというだけでなく、くらしとも見え芸術とも見えるへりの部分が「限界芸術」としてあり、くらしとも見え学問とも見える学問が「限界学問」としてあり、くらしとも見え政治とも見える部分が「限界政治」としてある。(中略) 私としては、限界政治としてのアナーキズムと声なき声、限界学問としてのサークル活動、限界芸術としてのらくがき、雑談、アダナ、かるたとりなどが、主な関心となった。(445～446頁)

60年代を中心に展開された「限界芸術論」には、40年代末から鶴見が取り組んでいた「大衆芸術」研究からの発展という側面があった。しかし、その一方で、鶴見が芸術に限らず、「限界政治」や「限界学問」にも注目していたという事実をふまえると、60年代には、「限界領域」そのものに重要な意味が見出されていったと捉えることができる。

(3)「限界領域」と抵抗の可能性

以下では、「限界学問」に関する鶴見の議論を分析し、「限界領域」にどのような可能性が見出されていたのかについて考察する。さきほどの引用文に見られるとおり、鶴見は、サークル活動を、「限界学問」として重視していた。後述する、思想の科学研究会を母体とした共同研究会「集団の会」は、その具体的取り組みのなかの最も重要なもののひとつであるが、それに先立って鶴見は、全国で活動しているサークルの掘り起こしにも取り組んでおり、1956年4月には、雑誌『中央公論』において、各地のサークルによって発行されている同人誌やミニコミ誌を紹介する連載「日本の地下水」を武田清子、関根弘とともに始めている。「日本の地下水」は、1960年1月から『思想の科学』に移り、以降、第6次の終刊(1981年3月)まで同誌で連載

された。

鶴見は、「サークルと学問」で、官立大学を拠点とするアカデミズムに代表される学風を「あてはめ学風」、総合雑誌を中心とするジャーナリズムを「つぎはぎ学風」、サークル活動における学問への姿勢を「つつみこみ学風」と表現する。¹²⁾そして、「つつみこみ学風」は、「現代の日本人の日常生活の中の関心によって、かなりひろい範囲の研究対象を包括する」ものであり、その関心は、「日常生活に根ざすものとして恒久的な性格」を有しているとともに、「毎日の雑談の中に刻々思いもかけぬ方向へあたらしく動いてゆくような偶然的性格をもっている」と評価する。¹³⁾ここでは、日本の大学で優勢な「あてはめ学風」に対して、日常生活と学問との境界にある「限界学問」の学風が持つ独自の価値が捉えられている。鶴見のサークル研究には、『アメリカ哲学』で掲げられた「反哲学主義」の実践として取り組まれた側面があったと言える。

1963年1月、鶴見は大沢真一郎や丸山睦男らとともに、サークルを研究するサークル「集団の会」を、思想の科学研究会を母体とした共同研究会として立ち上げた。10年以上に及ぶ同会の研究成果は『共同研究集団』（平凡社、1976年）として刊行されるが、同書に寄せた「なぜサークルを研究するか」において、鶴見は、「学問における権威主義からはなれてゆく一種の遠心力として」、「集団の会」を続けてきたと振り返り、無名の人びとによって地道に続けられているサークル活動が持つ「あたりまえの人間として生きてゆきそれで終ればいい」という「普通人の哲学」には、「権威主義におしまけない力」と評価する（20頁）。日常生活のなかから現れた主題を、雑談を通して集団内で共有するというサークル活動における「限界学問」は、「制度化され管理された研究体制ではなかなか見出されない」創造性を持っており（9頁）、体系化されない多元的な知を生み出す可能性がある」と評価している。さらに、このような要素に加えて、鶴見はサークル活動に政治権力の抑圧に対する抵抗運動としての側面も見出している。

権力による抑圧に対する抵抗運動としてならば、サークルは、ある局面では、政党の組織以上に、無規律である故の機動力を発揮することができるし、弾圧をくぐりぬけて抵抗の形をかえてつづけてゆくこともできる。(18頁)

ここで指摘されているのは、「限界学問」が「限界政治」へと転回する潜在的可能性であるが、このような「限界領域」における抵抗の可能性を具体的に展開したのが、同時期に鶴見も関わっていた「声なき声の会」や「ベ平連」といった個人原理に基づく新しいタイプの社会運動であったと言える。鶴見において、「限界領域」は、権威主義や政治権力、さらにはより日常的な社会的抑圧などに対する抵抗の可能性を人びとに与える基盤として認識されていたのである。

第2節 第6次『思想の科学』における「サブカルチャー」論

(1) 「サブカルチャー」とは

以下では、鶴見の「限界領域」論をふまえつつ、第6次『思想の科学』における「サブカルチャー」論の位置づけを考えていく。まずは第6次の創刊号（1972年4月号）に編集委員会が寄せた「創刊にあたって」の一節を取り上げる。

私たちは、思想を、何よりもまず、人びとの日常生活のなかで生きてはたらいっているものとしてとらえる。私たちは、管理され操作されている日常性に批判的に対峙しつつも、そのかたくなさの底に息づいている生の豊さを見定め、日常生活に根ざした自主的な思想を創造するために、〈思想の科学〉の認識の方法をよりいっそう鍛えていきたい。

同誌を担った人びとが重要な問題として捉えた「管理され操作されてい

る日常性」については後で詳しく述べることにして、ここでは、「日常生活に根ざした自主的な思想」について考えていく。第6次の創刊から2年半同誌の「編集代表」を務めていた大沢真一郎は、1974年10月号の「編集後記」において、「1972年4月から始まった第6次『思想の科学』の目指したものは、「私たちの生きる根拠を人びとの暮らしそのものの内に探ろうとすることであった」と述べている（96頁）。大沢の後を承けた矢部基晴が編集代表を務めた1974年11月号から1976年8月号までの時期にも、「私生活再考」（1974年12月号）や「ゆたかな生活語を求めて」（1975年4月号）といった特集が組まれている。ここから、第6次では編集代表が変わっても、「日常生活に根ざした自主的な思想を創造する」という創刊時に掲げられた目標が一貫して保たれていたことがわかる。

以上のような同誌の傾向を象徴する主題として、「サブカルチャー」を挙げることができる。この概念を中心的に取り上げた特集は「日本のサブカルチャー」（1975年4月臨時号）の1号のみであるが、先に挙げた天野正子をはじめ同誌に関わった多くの人びとが、第6次を象徴する概念として「サブカルチャー」に言及している。社会学の分野において「サブカルチャー」は、「ある集団に特有の価値基準によって形成された文化で、その社会の支配的文化の中に飛び地のように存在するもの」と定義されている¹⁴⁾。鶴見俊輔は、「日本のサブカルチャー」特集の「編集後記」において、同特集号の企画をたてる際、見田宗介・栗原彬と相談し、「アメリカ社会学の術語としてでなく、今の日本の通用語としてのサブカルチャーの定義で特集を組んでみようということになった」と振り返っている（156頁）。そのため、同誌で主題化された「サブカルチャー」とは、アメリカで生まれた上記のような社会学概念や、今日において「下位文化」や「副次的文化」と規定される一般的な意味での「サブカルチャー」ではないと言える。鶴見は「サブカルチャー」を以下のように定義している。

論壇ではとりあげられることのまれな、思想として名をつけることのむ

ずかしい、しかし実質的にわれわれの生き方を律している裏文化、それを日本のサブカルチャーと呼ぶことにしよう。それはもともと「思想の科学」が研究すべき主題であり、この雑誌の30年近い歴史の中で、はじめは別のものをねらって、まわり道をとおって今ようやく本道に達したという歴史の皮肉を考える。(156頁)

40年代後半以来、『思想の科学』は、日常生活に根ざした思想や文化に注目してきた。鶴見は「もともと「思想の科学」が研究すべき主題」として「サブカルチャー」を位置づけているが、これは第1次のころから、同誌のなかで「ひとびとの哲学」に対する関心が共有されていたという事実をふまえたものである。そして、その主題は、『芽』の時期に確立し、第3次・第4次のころの大幅な「大衆路線」への転換を経て、自主刊行へと移行していくなかで「本道に達した」のである。この記述からは、第6次、ひいては『思想の科学』及び鶴見俊輔にとって、「サブカルチャー」という主題がいかに中心的な問題関心として重要なものであったのかを読み取ることができる。

では、そのような同誌の歴史のなかで、〈70年代〉に展開された「サブカルチャー」論には、どのような特徴があったのだろうか。

(2) 「限界領域」論から「サブカルチャー」論への展開

以下では、「限界領域」論から「サブカルチャー」論への展開を考えるために、サークル研究を通して鶴見が提起した「限界学問」論が、第6次『思想の科学』のなかで、どのように継承され発展していったのかに焦点をあてる。

「集団の会」の研究や「日本の地下水」の連載に象徴されるように、『思想の科学』というメディアには、全国各地にあるサークルの結節点としての側面があったと言える。天野正子は、日本全国にある無数のサークルのなかから、九州の「炭坑」に生活現場を持つ活動家が集まってできた『サークル村』や、戦争体験の記録を柱に生活記録を綴っていた全国的なサークル「山脈の会」といった集団を取り上げ、それらのサークルは、「思考のベクトル

をつねに生活「現場」にすえる人たち」によって担われていたと主張し、50年代・60年代における彼ら「生活者」の実践を、日本の「地下水脈」として捉える。天野によると、彼らがもっていた気質や気風、方向感覚を引き継いだ人びとが、サークル活動が下火になった70年代ごろに、『思想の科学』のなかで新しいテーマを打ち出していったことで、「サブカルチャー」という主題が展開されたという¹⁵⁾。

天野が「サブカルチャー」の重要な担い手のひとりとして名前を挙げている福田定良（1917～2002）が「社会的人間の哲学」（1974年5月臨時号）で示した哲学論・学問論は、「限界学問」論から「サブカルチャー」論への展開を考えるうえで非常に重要である。福田の議論は、哲学や学問のあり方について、「限界学問」論の考え方と発想を共有しながらも、従来の哲学観・学問観をよりラディカルに変革しようとした点に特徴がある。日常論理学を提唱した福田は、もともと大学の哲学科の教授であったが、「普通の生活者の感覚」で哲学を学び直そうとして大学を離れた。「大学で講義されるようなのばかりが哲学じゃない。いわゆる哲学書だけが哲学ではないんです」と主張する福田は（16頁）、人びとが日常生活のなかで抱く「面白い」という感覚を重視し、そのような感覚を出発点とする者同士が話し合うこと自体が「哲学的」とであると捉える。サークルという「限界学問」の場を重視した鶴見に対して、福田の考える学問は、思索の場としてのグループの存在自体を必要としていない。福田のなかでは、「面白い」と思ったことを日常会話のなかで共有し合うということ自体が「哲学的」とであると捉えられているためである。

このように福田は、鶴見俊輔の「限界学問」の考え方をさらに発展させ、哲学観・学問観のよりラディカルな変革を志向した。鶴見は「思想の科学と新しい哲学の方向」（1976年5月号）で、「違う日常生活をもち、違う仕事をもっている人間」が話し合う際に必要な「範疇」を「思索専用の場」ではなく、「日常生活の場」に見出した福田の方向性を高く評価し、福田の論考に見られるような「哲学の新しい方向」は、第6次『思想の科学』全体が目指

すものになってきていると主張している（189頁）。

日常思想を主観的なものにとどめないで相互主観性の場を作る、インターサブジェクティヴィティー、これがいまの思想の科学の基本的な哲学形成の場だ。（189頁）

同論考のなかで、鶴見は第6次が打ち出した重要な方向性のひとつとして、「人間が生きているところには必ず思想がある」という発想にたつ「裏通りの文化」（「サブカルチュア」）を挙げている（190頁）。そのような特徴を持つ第6次のなかで、福田は「限界学問」の考え方をさらに突き詰めて議論を展開した人物であった。異なる仕事を持つ素人が学問をするための「範疇」を「思索専用の場」ではなく、「日常生活の場」に見出していた福田は、サークル活動が下火になっていた〈70年代〉において、日常性そのもののなかに存在する「サブカルチュア」の思想を捉えていくことの重要性を提起した。そして、これは、第6次『思想の科学』の基本的な方向性でもあった。

第3節 「サブカルチュア」論から見た〈1970年代〉

（1）第6次『思想の科学』が捉えた〈1970年代〉の「管理社会」

以下では、第6次『思想の科学』誌上で重視されていた〈70年代〉の社会課題に対して、「サブカルチュア」論に根ざした抵抗がどのようなかたちで実践されていったのかを明らかにする。前引の「創刊にあたって」で重要な問題として捉えられていた「管理され操作されている日常性」は、同誌において「管理社会」の状況に起因する問題として批判的に検討され、「管理をくずすスタイル」（1973年5月号）や「管理社会＝現代の呪縛」（1978年10月臨時号）、「現代管理社会と名人」（1980年6月号）など、この問題を扱う特集がさかんに組まれた。では、これらの特集が扱った「管理社会」とは、具体的にどのような状況を指していたのだろうか。

同誌における「管理社会」論の中心人物であった高畠通敏（1933～2004）は、「管理民主主義の政治構造」（1978年10月臨時号）において、当時の日本社会の状況を「柔軟な管理社会」と表現し、ファシズムやスターリニズムに代表される典型的な「管理社会」のイメージと区別する。高畠によると、「柔軟な管理社会」には、「自由な選択と民主的な手続きというたてまをふまえながら、多くの人びとが、自身の生活の主体であるという感覚を喪失してゆく」という特徴があるという（4頁）。このような「管理社会」の状況は、国家や企業といった巨大組織が飽和し、その体制が膠着化することで維持される（7頁）。そして、人びとは「社会生活上のさまざまな機能的必要」から、何らかの組織に加入しなければならないため、この社会構造は再生産されていく（5頁）。

ここで高畠が同時代的に捉えた「管理社会」は、のちに歴史家が指摘することになる「企業社会」とかなりの程度重なっているように見える。たとえば、渡辺治編『高度成長と企業社会』（吉川弘文館、2004年）は、高度成長期以降の日本社会の状況を「企業社会」という言葉で捉え、その骨格は60年代に形成され、70年代に定着したと指摘している。同書は、労働組合と会社との協力関係に見られるような、高度成長のなかでそれまでの抵抗が包み込まれていく「企業社会」成立の状況を捉えており、1973年に起こった第1次オイル・ショックがこのような状況を強化・定着させる契機になったと述べている（98～99頁）。

このような指摘をふまえると、同時代に高畠が「管理社会」と呼んだような状況は、60年代を中心とする高度成長期に出現し、第1次オイル・ショック後の不況を受けてさらに強化されたと捉えることができる。オイル・ショックのインパクトは第6次の誌面に直接的には現れていないが、同誌における問題提起からは、オイル・ショックを契機とする「管理社会」の強化が、人びとの日常生活に深刻な閉塞感をもたらしていたことを読み取ることができる。この時代に、教育現場では、大企業に入って「安定した」収入と生活を得るための競争が加熱していき、労働現場では、社員の多くが企業の

ために献身的に働くことをますます求められるようになった。そして、「生き残り競争」の渦中にいた社員たちが、そうした期待に応えようとしたことで、長時間労働が常態化していったと言える。¹⁶⁾

以上のような日常生活そのものに大きな影響を与える社会変容に対して閉塞感を抱いた人びとが提起した問題こそが、「管理社会」というテーマであった。そのような意味で、第6次『思想の科学』における「管理社会」論は、当該期の社会において顕在化してきた喫緊の課題に正面から取り組もうとするものであったと評価できる。

(2) 管理化に抗する「サブカルチャー」の実践

同誌において、「サブカルチャー」論は、おもに「管理社会」の状況に対する抵抗として実践されていった。以下では、「管理社会」の問題が顕著に現れた会社という場において、田辺道雄というひとりの銀行員が行った管理化に抗する実践を取り上げ、「管理社会」に対する「サブカルチャー」の具体的な抵抗の一端を垣間見てみたい。

大学卒業後に銀行へ入社した田辺は、入社後の数ヶ月で、企業が社員を全面的に管理しようとしているという状況に疑問を抱くようになる。そして、『思想の科学』への投稿を通して、企業による全面的な管理化から免れる方法を模索し始める。田辺は、「入社4ヶ月目に思うこと」(1972年11月号)で、仕事を辞めることが多くのサラリーマンにとって現実的でないということや、既存の「従業員組合」が形骸化しているということをふまえて、残業や転勤を拒否したり、「市民意識」を持ったりすることで、企業の内部で一人ひとりが戦っていく必要があるということを強調する(99～100頁)。

その後、田辺は職場内で管理化から免れるための個人的な実践をさまざまなかたちで試みるようになっていく。その一例として挙げられるのは、「拭き掃除の思想」(1973年5月号)で紹介されている、職場内で女性社員にのみ課せられていた始業前の拭き掃除に参加するという実践である。田辺が拭き掃除に参加することを通して見出したのは、社内での男女差別が男性社員

に「管理者意識」を持たせていること、それにより男性社員は自らが管理されていることを忘れていること、そして、そのような巧妙な意識操作により社員が相互に管理しあうよう仕向けられているということである（76頁）。田辺は、このような巧妙な意識操作へのささやかな日常的抵抗として、拭き掃除に参加したのであった。

また、「[会社中心]はやめましょう」（1974年8月号）では、「企業批判の態度を一貫して持ち続けること」の必要性を訴え（19頁）、マスコミで喧伝されているような企業社会批判の用語を使うのではなく、「自分の生活体験から物を考え、行動する姿勢」を持つことが重要であると主張する（17頁）。田辺自身は、残業に対する不満を出発点にして、それを実際に拒否するという態度を保つことで、「企業の論理」から距離をとることができているという（20頁）。会社に対してこのような態度を取り続けたことで悪評を買い、支店へと左遷された田辺は、やがて「反「評価」の思想」に行きつく（「反「評価」の思想」1976年9月号）。

多くの人々が反「評価」の立場に立てば、仕事で無理をしたり、無駄な競争をすることもなくなり、会社がもっと居心地のよい所になり、ひいては世の中全体が暮らしやすくなるでしょう。（56頁）

田辺は、「企業の論理」に対抗するために、労働組合のような組織やサークルのような集団には頼らず、企業に属しながらでも一人ひとりができる抵抗のあり方を模索した。とくに、「モーレッツ社員」としての生き方を拒否するという姿勢を示した「反「評価」の思想」においては、「管理社会」を支える価値観を相対化することによってそこから免れ、経済成長とは別の意味での日常的豊かさ（居心地のよさや暮らしやすさ）を展望する地平に立ちえていたと言える。徹底して自分自身の日常生活の場に立脚する田辺は、「管理社会」の現状を打破しようとする「サブカルチュア」をこのようなかたちで実践していたのであった。

(3) 画一化に抗する「サブカルチャー」の実践

第6次『思想の科学』では、管理化の問題と併せて、生活の画一化の問題も重点的に取り上げられている。高度成長下での耐久消費財の普及は、人びとの生活を均質化させ、〈70年代〉には、広告産業により記号的消費が煽動される状況も生まれてきつつあった。また、1969年に新全国総合開発計画が策定され、70年代初頭には「日本列島改造」ブームが起こるなかで、このような生活の画一化は地方へも及んでいった。第6次『思想の科学』は、消費生活が高度化し広告産業に煽動されるなかで起こったこのような生活の画一化を、それが地方に及んでいく局面も含めて問題化した。本項では、第6次『思想の科学』がこの問題にどのように取り組んだかを具体的に見ていくが、その際に切り口とするのは、「言葉」というテーマである。同誌でさかんに交わされた「言葉」をめぐる議論には、「サブカルチャー」に立脚するかたちで、生活の画一化に抗うという意図が孕まれていたからである。

この観点から注目されるのは、特集号「日本のサブカルチャー」（1975年4月臨時号）の巻頭論文津村喬（1948～2020）「仮面と変身—サブカルチャーの政治経済学のためのノート—」である。この論考において、津村は、同時代の日本がすでに広告産業に煽動される記号的消費の段階に入っていることを指摘しつつ、広告産業による言葉の恣意的な使用に留意する必要性を唱えている。津村によると、広告が扱う言語には、日常生活で使われる「話言葉（パロール）」とは異質の修辞法をもった「言論（ディスコース）」としての側面がある（11頁）。津村は、同時代の人びとが広告産業の「言論」に煽動され画一化された価値観や生活様式に誘導されていく〈70年代〉の状況を批判的にふまえつつ、日常的な「話言葉」の領域からそのような画一化に抗うことを示唆している。広告に操られた「ブルジョア的」消費（「仮面」）とは別の豊かさを日常性の領域から構想しなおす（「変身」）ことが（26頁）、津村にとっての「サブカルチャーの政治経済学」であった。

また、第6次『思想の科学』を地方で担った人びとの間では、暮らしのな

かに企業の製造した既製品が多くなっていき、衣食住の画一化・規格化が全国的に進行しているという状況が、批判的に認識されていた。同誌では、このような全国的な生活の画一化という現象についても、「言葉」というテーマを切り口として、さかんに論じられている。

岩手県和賀町（現在の北上市）にある「かくし念仏」を伝える家で生まれ育った画家の阿伊染徳美（1935～2016）は、東京の武蔵野美術大学で講師を務めた経歴を持ち、70年代には思想の科学研究会の会長も務めた。地域開発によって激変した郷里の景観を目の当たりにした阿伊染は、「言葉」に重点を置きながら、郷里の信仰や慣習を伝えようと試みる。人びとの間で傳承されてきた日常生活の思想を掘り起こし、それを幅広く発信しようとする阿伊染の試みは、全国的に進む画一化に対して「サブカルチュア」の立場から抵抗しようとする実践であった。この文脈でとくに重要なのは、「標準語でしゃべると、力が抜けるような気がする」という阿伊染が（3頁）、あえて東北地方の言葉で書いた「わがへらめき」（1973年12月号）である。この論考において阿伊染は、「自分の言葉」というものが持つ「自分を動かすし、他人をも動かす」力の可能性を指摘し（3頁）、郷里における「クロボドゲの二百数十年の、弾圧と反抗、持続、連帯の人民の歴史」を語り伝えるために、東北方言特有の発音を表記するための新しい文字を発明するにいたっている（5～7頁）。

また、阿伊染は、自分自身の祖母が残した「七度の餓死にあうたて、一度の戦にあうな」という言葉を挙げ、歴史的に飢饉の多かった和賀地方で言い伝えられてきたこの言葉には、「今の反戦だ、平和だ、と叫ぶより、ずーんと重みがある」と主張する（8～9頁）。阿伊染は、地域の歴史や人びとの生活体験に根ざしていることこそが、言葉の説得性を担保すると捉えていた。郷里における信仰や慣習、人びとの生活に根ざした言い伝えといった「裏文化」を掘り起こし、それを日常生活に根ざした「生活語」を通して幅広く発信しようとした阿伊染の「わがへらめき」は、生活の画一化に対する抵抗としての「サブカルチュア」の実践を地方の立場から試みたものであったと言

える。

以上見てきたように、第6次『思想の科学』では、「管理社会」の問題に加えて、生活の画一化が全国的に進行しているという状況が〈70年代〉における重要な問題として指摘され、そこに対して、「サブカルチャー」の実践、とりわけ「言葉」というテーマを切り口とした言説的介入がなされていた。

おわりに

本稿は、1970年代を中心に刊行されていた第6次『思想の科学』における「サブカルチャー」論に焦点をあてることで、日本の〈70年代〉に特徴的な思想課題を捉えていくための視座を構築することを課題としてきた。

戦前・戦中期にアメリカでプラグマティズムの哲学を学んだ経験を持つ鶴見は、人びとの日常生活から遊離しがちな日本の哲学観を変革する必要性を訴えた。このような鶴見の問題意識は彼を中心とする『思想の科学』誌上にも顕著に現れており、同誌は、戦後の比較的早い時期から、「ひとびとの哲学」をテーマとして取り上げ、大衆芸術研究や聞き書きなど、それまで「学問」として位置づけられることの少なかった分野を開拓し、人びとの日常生活に重点を置くスタンスを確立していった。さらに鶴見は、60年代に入ると、芸術・学問・政治といった諸分野と日常生活との境界線上にあたる「限界領域」に関する議論を展開し、そこに権力に対する抵抗の可能性を見出していった。

第6次『思想の科学』誌上では、教育現場や労働現場といった領域で巧みな管理化が進行しているという状況と、消費生活の高度化や地域開発によって人びとの生活の画一化が進んでいるという状況が俎上に載せられていた。同誌は、高度成長期以来の社会変容がそのようなかたちで広く深く人びとの生活のなかに浸透しつつある時代として同時代の〈70年代〉を捉え、日常生活を基盤としながらそこに批判的に介入していこうとしたのである。本稿は、第6次『思想の科学』とはそのような言説的かつ社会的な営みであった

ということを明らかにするとともに、同誌の同時代的問題意識をふまえてつづ、その観点から〈70年代〉に特徴的な思想課題を把握・提示しようとする試みであったと言える。

そのような社会変容に対して、同誌では鶴見の「限界領域」論を思想的基盤とする「サブカルチャー」論が展開され、それに立脚した抵抗の実践がさまざまなかたちで現れた。こうした抵抗の実践の多くは、60年代以前にさかんであった大文字の政治を志向するような社会運動の形態を取るのではなく、職場や地域社会といった日常生活の現場において、一人ひとりの個人を担い手として展開された。鶴見は、「限界政治」論の発想として「男女のつきあいの中に政治があり、親子のつきあいの中に政治があり、もちろん友だちとのつきあいの中にも政治がある。ふつうは政治と考えられないところに政治はある」という考え方を挙げているが、¹⁷⁾「サブカルチャー」の実践には、まさにそのような日常生活の場における抑圧に対する抵抗としての側面があったと言える。

鶴見をはじめ同誌を担った人びとの関心の前景を占めていたものは、60年代以前にさかんに唱えられた「革命」という言葉に象徴されるような社会秩序の根本的変革ではなく、身近な日常生活のなかでさまざまな抑圧から自らの主体性を守り、同誌を結節点とするつながりのなかでその領域を徐々に広げていくことであった。戦後日本社会において強い影響力を持ったマルクス主義に依拠する体系的・組織的な思想や実践が下火となっていった〈70年代〉において、彼らの提起した「サブカルチャー」論は、日常生活を重視しつつも、そこに埋没することなく、むしろそこにおける個人を基盤として、主体的・分散的な抵抗を展開する可能性を確保しようとするものであった。個々の人びとの主体性に依拠したこのような分散的な抵抗の空間は、ささやかであったとしても、体系的・組織的な抵抗にはない可能性を持っていたと評価できるだろう。本稿は、このような視座から〈70年代〉を捉えることを提案する試みでもある。

なお、第6次『思想の科学』においては、ジェンダーの問題やアジアの問

題など、本稿では十分に扱うことのできなかった同時代の重要な課題も数多く取り上げられている。それらのテーマを切り口とすれば、〈70年代〉の別の側面に光をあてることもできるだろう。この点は今後の課題としたい。

[注]

- 1) 鶴見俊輔「編集後記」『思想の科学』1975年4月臨時号、156頁。
- 2) 宇野田尚哉ほか編『対抗文化史』大阪大学出版会、2021、223～238頁。
- 3) 成田は、The New Cambridge History of Japan, volume3 (Cambridge University Press, 2023)の第23章“A History of Mentalities in Modern Japan”においても、1973年の重要性を指摘する議論を展開しており、英語圏の日本研究においても注目を集めている。Laura Heinによる同書の序章参照。
- 4) 日高勝之編『1970年代文化論』青弓社、2022、267～268頁。
- 5) 思想の科学研究会・索引の会『思想の科学総索引』思想の科学社、1999、653～675頁。
- 6) 鶴見俊輔編『源流から未来へ』思想の科学社、2005、216～264頁。
- 7) 最近の代表的な研究としては、谷川嘉浩『鶴見俊輔の言葉と倫理』（人文書院、2022）や高草木光一『鶴見俊輔 混沌の哲学』（岩波書店、2023）などがある。
- 8) たとえば海老原武『雑種文化のアイデンティティ』みすず書房、1986、150頁。
- 9) 北河賢三「鶴見俊輔の思想・方法と大衆の思想」赤澤史朗ほか編『戦後知識人と民衆観』影書房、2014、342頁。
- 10) 初版は1950年に世界評論社から刊行された。本項で同書から引用する場合は、『鶴見俊輔集1』（筑摩書房、1991）に拠ることとし、本文中に同書の数ページを注記する。
- 11) 現在『限界芸術論』として知られる書物の基幹的部分は、『芸術の発展』というタイトルで、『講座・現代芸術1』（勁草書房、1960）に掲載された。本項で同論考から引用する場合は、『限界芸術論』（ちくま学芸文庫、1991）に拠ることとし、本文中に同書の数ページを注記する。なお、限界芸術論を主題とした近年の社会学的研究として、栗谷佳司『限界芸術論と現代文化研究』（ハーベスト社、2018）がある。
- 12) 『鶴見俊輔集9』筑摩書房、1991、79～82頁。鶴見「サークルと学問」の初出は、『思想』1963年1月号。
- 13) 同前、84頁。
- 14) 見田宗介ほか編『社会学事典』弘文堂、1988、337頁。
- 15) 天野正子「報告「地下水」からサブカルチャーへ」鶴見俊輔編『源流から未来へ』思想の科学社、2005、216～234頁。

- 16) 第6次『思想の科学』では、職場で少人数のチームをつくり生産性向上のために互いに意見を出し合い競争し合う ZD (Zero Defects) 運動や QC (Quality Control) サークルに見られるような、職場における巧妙な管理化の実態についてもさかんに論じられている。
- 17) 鶴見俊輔『期待と回想』ちくま文庫，2022，315～316頁。

(大学院博士前期課程修了)

SUMMARY

Japan's Seventies from the Perspective of *The Science of Thought* and Tsurumi Shunsuke's "Subculture" Theory

Genki NISHITANI

This study aims to present a new perspective of Japan's discursive space in the seventies by analyzing *The Science of Thought* (*Shiso no Kagaku*, 1946-1996) and Tsurumi Shunsuke's (1922-2015) key concept of "subculture." Although the relatively calm seventies does not attract as much academic attention as the tumultuous sixties, this decade, which covers the peak of Japan's high economic growth and its aftermath, is an important period in which Japan experienced profound social transformation and requires closer examination. *The Science of Thought* and Tsurumi Shunsuke's "subculture" theory provide important clues to conduct such research.

The Science of Thought started as an academic journal to introduce Anglo-American thoughts in Japan, but gradually changed to a magazine aimed at nurturing Japanese people's vernacular critical thoughts based on their daily lives. Tsurumi Shunsuke, one of the most important intellectuals in postwar Japan, played a leading role in the magazine since its launch and introduced the concept of "subculture" in the seventies to critically analyze ongoing social transformations. He used this term not in an ordinary sense, but as a unique methodological concept to identify the unnamable culture that underlies Japanese people's daily lives, which was rarely discussed by journalism or academia.

The Science of Thought in the seventies, using this methodological concept, critically analyzed the social transformations of Japanese people during and after the era of high growth. It problematized points such as newly introduced and increasingly enforced disciplines in workplaces and schools, the homogenization of lifestyles, and the disappearance of local cultures in rural areas. Tsurumi and other contributors to the magazine were primarily concerned with the fact that people's daily lives were half-unconsciously but strongly homogenized and disciplined under the profound social changes. They also attempted to nurture people's potential power to resist such oppressive social changes in their daily lives

using the methodological concept of “subculture.”

In the sixties, it was common for people to join street demonstrations. As *The Science of Thought* indicates, the battlefield shifted from the streets in the sixties to people’s daily lives in the seventies. Thus, by revealing the importance of this shift, this study presents a new perspective of Japan’s seventies.